目次

はじめに　v

第一章　少年時代……1

第一節　豹子投胎……1
第二節　郭家の人々……2
第三節　大家族子弟の教育……4
第四節　山水秀美の故郷……9
第五節　古典への目覚め……12
第六節　苦悶の時代……19
第七節　旧式な結婚……23

第二章　日本留学時代……27

第一節　異国での新生活……27
第二節　日本の自然を満喫して……30
第三節　佐藤富子との出会い……34
第四節　医学と文学……40

第三章　古典文学の素養と古典詩創作……49

第一節　少年期、青年期の漢詩……49
第二節　漢詩に見る風景……53
1　故郷時代の漢詩……53
2　日本留学期の漢詩……64
3　古詩の中の風景……70

第四章　『女神』の世界……85
第一節　新体詩創作の歴史的意義……85
1　「風景」発見の瞬間……86
2　登山体験……89
3　「風景」と「内面」……91
4　「言文一致」への指向……94
5　新詩実践……100
第二節　「電火光中」と西洋絵画の関連……109
1　懐古――貝加尔湖畔之蘇子卿――素材と主題の関係……111
2　ミレーの絵画との関係……119
3　観画――Millet 的「牧羊少女」――主題変更の意味……124
4　絵画、風景と詩歌との関連……128
5　讃像――Beethoven 的肖像……129
第三節　「天狗」の表現世界……134
1　天狗とは……135
2　小宇宙と大宇宙の融合……138
3　解剖精神の止揚……144
第四節　佚詩「狼群中一隻白羊」に見る民族精神……152
1　「狼群中一隻白羊」序に見られる問題点……154
2　二つのキーワード……160
3　白のイメージ……166
第五節　反植民統治の詩歌「勝利的死」……170
1　創作の背景と媒体資料の処理……171
2　詩の構造の多重性と西洋詩歌の受容……176
3　東洋と西洋の観照……183

第五章　小説創作の試み……193
第一節　「牧羊哀話」の創作背景とモチーフ……193
1　二つの史実……194
2　悲恋と反日のモチーフ……198
3　六月十一日という日……203
第二節　「残春」に見られる医学と文学の問題……208
1　近代社会における結核の流行……209
2　隠喩としての結核……210
3　「残春」における結核の意味……212
第六章　日本へ亡命……221
第一節　上海での籠城生活……221
第二節　北伐戦争への参加……223
第三節　東海を跨って……225
第四節　日本での生活……228
第五節　中国古代史研究……233
第七章　亡命期の作品……239
第一節　身辺小説「鶏之帰去来」……239
1　身辺小説の体裁……240
2　朝鮮人問題と関東大震災……242
3　朝鮮人労働者の状況……244
第二節　日本の雑誌社との交流……253

1　郭沫若と白揚社 …… 254　2　郭沫若と雑誌「同仁」 …… 260　3　郭沫若と「日本評論」 …… 265
第三節　隋代の音楽家萬宝常研究 …… 271
1　中国古代文字研究 …… 272　2　林謙三との交流 …… 274　3　萬宝常への注目 …… 276
第八章　日本――第二の故郷 …… 291
第一節　恋人に捧げる詩 …… 293　第二節　文明の監獄 …… 299
第三節　戦争に引き裂かれた家族 …… 301　第四節　苦難の聖母 …… 308
むすび …… 316
主要参考文献 …… 321
あとがき …… 325

はじめに

郭沫若（一八九二年～一九七八年）は、中国が清王朝から中華民国、中華人民共和国へと進む歴史の中を生き、活躍した政治家、文学者、考古学者、歴史研究者である。日本留学中に出版した処女詩集『女神』は、中国の近代口語詩の確立に貢献した点で、中国近代文学史上画期的な作品として、その位置を不動のものにしている。郭沫若の一生は、日本と深く関わっている。彼は青年期に日本に留学（大正三～十二年）し、医学を学んだ。壮年期に日本に亡命（昭和三～十二年）して、中国の古代史、古代文字の研究に力を注いだ。前後約二十年間の日本での生活は、後に彼の文学及び考古学、歴史学の基礎を築きあげた。また、日本留学中に初めて自由恋愛を体験し、日本人女性佐藤富子と家庭をもち、留学期、亡命期に渡り、苦楽を共にした。この体験、いわば国際恋愛、国際結婚は、彼の人生及び文学に大きな影響を及ぼしたのである。従って、郭沫若を論ずるとき、日本という要素を抜きにしては語ることができない。

郭沫若に関する研究は、中国においてすでに半世紀にわたり続けられてきた。これまでの研究は、基本的に愛国主義、五四精神、マルクス主義といった思想理論に基づいている傾向が強く、資料、史実の調査、文学理論に基づくテクストの評価は必ずしも十分とは言えない。特に、郭沫若が日本と関わった二つの時期に関する研究は、まだ多くの空白を残している。二〇〇四年に、武継平氏はその著『異文化のなかの郭沫若――日本留学の時代――』（九州大学出版会）を刊行し、郭沫若の留学時代を中心に、その生活、文学、思想を考察した研究成果を公表した。これは、郭沫若を主題にした研究書としては日本初のものである。福岡時代の郭沫若に関する多くの資料を発掘し、当時の生活ぶりと文学活動の様子を具体的に伝え、示唆的な著書である。

本書『詩人郭沫若と日本』では、彼の留学と亡命の二つの時期に焦点を当て、彼と近代日本との精神面での交流を

明らかにしていくことを目的とする。

郭沫若は、一九一四年（大正三年）に来日した。この時代の日本は、明治以来の近代化が進み、西洋の近代文明と東洋の伝統文化が入り混じり、政治、文化、社会において民衆主義、自由主義思想が浸透する、所謂大正デモクラシーの時代に入っていた。郭沫若は、この未知の土地でさまざまな体験をし、多くのものを学んだのであろう。九州帝国大学在学中に出版した詩集『女神』は、まさにこの時代に彼が吸収したさまざまな要素を内包した作品である。それは、決して愛国主義や五四精神だけでは語り尽くせないものである。例えば、近代医学、自然や風景の発見、愛の苦悩、西洋文学や日本文学への共鳴、古典の止揚など多方面に渡るものがあった。『女神』は、詩人郭沫若の出発点であるだけに、これに含まれているさまざまの要素が重要な意味をもつ。それをひとつひとつ、できるだけ丁寧に拾い上げる必要があるのではないだろうか。

二〇〇五年に、筆者は大高順雄氏、武継平氏とともに郭沫若の書簡集『桜花書簡』の日本語訳を刊行した。二〇〇八年から二〇〇九年にかけて、中国四川省教育庁の社会科学重点研究課題「郭沫若在日本的史料搜集及研究」共同研究（岩佐正暲、藤田梨那、岸田憲也、郭偉）に参加し、その成果として『日本郭沫若研究資料総目録』（明徳出版社）を出版した。二〇一一年に、筆者は『女神　全訳』（明徳出版社）を刊行した。このような仕事を通して、従来の郭沫若研究は、多くの史料や史実を見落としていることに気づき、改めて資料調査や作品解釈の重要性を認識した次第である。

さて、近代詩歌の確立は、単なる詩形の改革ではなく、新しい思想、新しい感性、新しい美意識が生まれて初めて可能になる。郭沫若においてそれはどのように自覚され始めたのであろうか。口語詩の確立と近代的自我意識はどのように関係するのか。詩歌において、郭沫若は何を打ち出そうとしたのか。これらの問題を考えるときに、柄谷行人氏の『日本近代文学の起源』及びファン・デン・ベルクの『The Changing Nature of Man』に見られる近代意識と「風景」の発見との関係についての論述は示唆的である。『女神』の特質を考える時に、日本という文化的環境、風土

が必然的に関わってくる。筆者は「風景」の発見が郭沫若の口語詩創作に一つの「突破口」を与えたのではないかと考える。「風景」の発見は内面の発見を導き、郭沫若詩歌の中で不可欠な要素となる。このような視点から郭沫若の詩歌を見た場合、彼が近代詩において追求したのは、内なる「声」の優位ではないか、ということが見えてくる。本書第一章から第五章では、日本留学を中心に詩人誕生のプロセスを探っていく。

本書第六章から第八章では、主に日本亡命期を中心に、その思想的変化と文学創作、歴史研究について論じる。亡命の十年間は生活と精神の両面において、彼は大きな試練を受けた。その間、彼は日本の左翼文学者や親中派の日本人と交流をもった。またマルクス思想へのアプローチ、古代史研究と甲骨文字研究は、その後の彼の精神的基盤を固め、歴史研究家としての基礎を構築した。日中関係が日を追って険悪になる中で、彼の作品にも大きな変化が見られる。自伝や社会性の強い身辺小説を書き始めるのもこの時期である。

本研究で用いた手法には、主に三つの側面がある。

一、時代背景、体験の側面。作品に関係すると思われる時代背景、事件、作者の体験等をできる限り厳密に調査し、歴史的事実が作者に及ぼした影響、作品との関係を明らかにし、研究に反映する。

二、テクスト、関係資料の側面。取り扱う作品について、初出や所収を調査する。いわばテクストクリティックを重視する。新聞や雑誌にのみ掲載で、作品集、全集に未収録の作品も、必要と判断したものは、研究対象として取り上げる。研究対象の作品と関係のある外国の作品は、できるだけ原文を用いて比較分析を行う。いわば比較文学の手法である。

三、理論的な側面。郭沫若が留学中に接した心理学、医学及び西洋の文学理論により創作の理論根拠を得ている。彼自身の文学理論は作品研究の根拠になりうる。また文学批評に関する心理学や文学理論も作品研究に応用す

る。

日本亡命中に郭沫若は「自然への追懐」というエッセイを発表した。その中で彼は、留学時代を懐かしく回想し、「今でも第二の故郷のような感じがする」と言う。この言葉は何を意味しているのか。本書は二十年にわたる郭沫若と日本の歴史から、その答えを探っていく。